

タイトル：2021年度 教育セミナー（第17回）

日時：2021年9月16日（木）～19日（日）

オンライン開催

「オスマン帝国における汎スラヴ主義の影響の実態—1860年代後半の動向」

小川 伸（九州大学大学院人文科学府）

九州大学のイスラム文明史学の修士課程1年生は、中東☆イスラーム教育セミナーに毎年参加しているので、私も今回参加させていただきました。今回のセミナーでは、先生方によるセミナーや他の受講生の発表、そして私の発表に対する質問・コメントによって、大きく知見を広げることができました。

今回のセミナーにおいて、私は「オスマン帝国における汎スラヴ主義の影響の実態—1860年代後半の動向」という題目で発表させていただきました。オスマン帝国の政治家であるミドハト・パシャの活動に関して彼の息子がミドハトの遺稿を編集して出版した伝記や、当時のロシア帝国のイスタンブル駐劄大使ニコライ・パヴロヴィチ・イグナチエフによる報告書と回想録を用いた上で、当時のオスマン側の史料で頻繁に言及されている、1866-68年のオスマン帝国内における汎スラヴ主義の影響の実態を検討しました。その結果、ミドハトの伝記では「スラヴ委員会」や「汎スラヴ委員会」の活動が汎スラヴ主義の影響の代表として扱われていますが、その記述は実態とかけ離れていることを指摘しました。そして、その原因には、当時のオスマン帝国高官が持っていた「オスマン版近代主義」や「帝国意識」と呼べる考え方を反映していると考えられることを指摘しました。その他にも、イグナチエフの報告書と回想録や先行研究に基づいて、ロシア・オスマン戦争(1877-1878年)以前の汎スラヴ主義者の活動は、教育的・宗教的支援がメインだと論じました。

発表後には、先生方や参加者の方々から多角的な視点からの質問やコメントをいただくことができました。先生方からは、イグナチエフの大使以前の経歴に注目することなど、私一人では思いつかないような視座からの研究手法についてのコメントをいただきました。その中でも、トルコ語・オスマン語・フランス語・ブルガリア語を含む多言語に精通し、オスマン帝国史を専門にされている高松洋一先生からのコメントは、かなり詳細なもので、今後の研究方針にかなり影響を与えられました。

高松先生からのご指摘は非常に的確で、充実したものでした。それゆえ、オスマン帝国史を研究し、中東☆イスラーム教育セミナーへの参加および発表を検討されている方には、発表を前提とした参加を強く勧めます。

最後に、長時間にわたる中身が詰まったセミナーに参加し、そして他大学で研究をされているの方々および先生方と深く交流できたことで、得難い経験をすることができました。このような機会を与えてくださったセミナーの先生方と事務局の千葉様、そして受講生の皆様に心よりお礼申し上げます。本当にありがとうございました。